

例の説明が行われた。大学の関連病院においても同様に各科の見学を行った。

キャンパスツアーや市内観光も日程に含まれており、多くの時間を使って現地の学生とのコミュニケーションをとることができた。

【考察】今回の交流で特に感じたのが次の3点である。

①英語の重要性 ②積極性 ③細かい気配り

英語に関しては学生レベルの交流であれば文法などを気にした会話よりも単語を組み合わせて相手にどのように伝えるかを重視したほうがコミュニケーションを取る上では重要である。

また、日本人の学生が尻込みする中で韓国の学生は積極的に交流を持とうとしてくれるので言葉が通じないとしても積極的に会話をするべきである。韓国の学生、先生方の配慮が特に感じられた。来年以降の国際交流において日本側もしっかり対応できる体制が必要である。

【結語】2016年慶熙大学国際交流報告を行った。

7) 口唇腺唾液分泌量の日内変動

○森 友理恵¹, 古山 昭², 大須賀謙二²

川合 宏仁²

(奥羽大・歯学部学生¹, 奥羽大・歯・口腔機能分子生物)

小唾液腺からの唾液分泌量は総唾液量の8%に過ぎないが、小唾液腺は口腔内に広く分布し、ムチンの含有率が高く、口腔粘膜の保護や嚥下の円滑化に重要な役割を果たすと考えられる。近年では、うま味覚刺激による小唾液腺唾液分泌促進がドライマウス改善に効果的との報告もあり、小唾液腺唾液分泌量を変化させる因子の究明は興味深い課題である。安静時における総唾液分泌量は概日リズムをもって変動する。しかし、小唾液腺唾液分泌量の日内変動に関する知見は少なく、味覚刺激誘導性の小唾液腺唾液分泌については全く研究されていない。そこで本研究では、安静時および味覚刺激により誘導される小唾液腺唾液分泌をヨウ素・ゲンブンを応用した方法で測定し、日内変動の有無を検討した。その結果、安静時の唾液分泌量は午前 ($0.85 \pm 0.44 \mu\text{l}/\text{cm}^2 \cdot \text{min}$, mean \pm SD, n=15) において午後 ($0.45 \pm 0.24 \mu\text{l}/\text{cm}^2 \cdot \text{min}$, n=14) よりも有意に多かった ($P < 0.05$,

Mann-Whitney U test)。さらに、うま味刺激によって誘導される口唇腺唾液分泌量も午前の方が午後よりも多かったが、興味深いことに、味刺激後の唾液分泌時系列も顕著に異なっていた。午前中(9時~11時)では刺激2分後の唾液分泌量は安静時唾液量の約2倍で、刺激後20分間では唾液分泌量の有意な変化は認められず、唾液分泌の持続的な増加が見られた。一方、午後(15時~17時)では、刺激2分後の唾液分泌量が安静時の約2.9倍と顕著な増大を示すが、刺激8分後には安静時の約2倍、刺激後14分以降では約1.5倍となり、刺激直後と刺激後14分以降とは唾液分泌量の有意な変化が認められ ($p < 0.05$, Wilcoxon rank sum test), 唾液分泌量の増加は一過性であることがわかった。

以上の結果より、①小唾液腺唾液分泌量の日内変動パターンは総唾液のパターンとは異なっていること、②刺激唾液分泌の時系列パターンも日内変動すること、の2点が示唆された。

8) 本学附属病院総合歯科診療室における歯科用実体顕微鏡の使用状況について

○神庭 一郎, 木村 裕一, 佐々木重夫

佐藤 穂子, 長崎 慶太, 金澤 朋昭

茂呂 有司

(奥羽大・歯・歯科保存学)

【緒言】医科における実体顕微鏡の使用は1920年代に始まり、歯科領域における使用は1990年代に入ってからであり、主に歯内療法学分野において用いられるようになった。現在では歯内療法学分野のみならず保存修復学、歯周病学、歯科補綴学、口腔外科学分野などすべての歯科治療への利用が模索されている。本学においても2002年9月には附属病院総合歯科診療室に1台が設置され、2008年6月には新たに1台が設置された。

【目的】本学における歯科用実体顕微鏡(以下、顕微鏡と略す。)の使用状況を知る目的で治療に使用した患者について調査した。

【調査対象および方法】平成27年9月1日から平成28年8月31日までに用いた患者(男性:33名, 女性:72名)における使用部位と回数、診断名